

【特別寄稿】

車椅子スペースから観る舞台

The sightlines from seats for people with disabilities in the theatres

岩崎千絵美

IWASAKI, Chiemi

キーワード: バリアフリー; 車椅子; 劇場; 車椅子スペース; 観劇;
ライブ・エンターテインメント

Received: 2021. 3. 11

1. はじめに

障害者や高齢者などが生活していく上で、支障となるものを除去していこうという「バリアフリー」という言葉は、段差の除去や手すりの設置・通路幅の確保・多目的トイレの設置・点字ブロックの設置等をするといった、物理的な障壁を取り除く意味でよく用いられているが、本来は社会的・物理的・制度的・心理的・情報面での障壁をすべて取り除こうとする考え方を指す。

筆者は日常生活の多くの場面において介護を必要とする重度障害者であり、移動には車椅子を使用している。我が国においては、2006年12月にバリアフリー新法¹⁾が施行されたことから、筆者のような車椅子ユーザーが街に出ることは、以前に比べ格段に快適になった。しかしながら、筆者が以前に拙稿²⁾で示したように、物理的障壁以外の面でのバリアフリーが十分に実現されているとは言い難い。

本稿では、本誌第16巻に引き続き、劇場のバリアフリーをテーマに取り上げる。

グランド・ミュージカルと呼ばれるような有名な作品は、収容人数1,300~2,000人程度の大きな劇場で上演されており、これらの劇場は、バリアフリー新法に則った基準を満たしていると考えられる。建物や構造物に関しては、車椅子ユーザー向けのエリア（以下、車椅子スペース）・多目的トイレ・エレベーターといった基本的なバリアフリー機能はほぼ備えており、著しく利用を制限されることはない。しかし、当事者に必要な情報が提供されていなかったり、健常者には当たり前のようにある選択肢がなかったりするほか、劇場空間でもっとも大切な「観え方」について、十分配慮がなされているとは言い難い。中でも、上演中に観客が立ち上がった際、車椅子スペースから舞台が観えなくなってしまう不満に関しては、以前より当事者から声が上げられているにも関わらず、ほとんど配慮はなされていない。

こうした現状を踏まえ、本稿では、車椅子スペースの設置場所や、上演中の観客の視線模式図を通して、車椅子スペースから舞台がどのように観えているかを報告する。また、限られた資源の中で、主催・運営者と筆者がどのような工夫を行っているか報告する。

なお、本来なら現地調査をすべき課題であるが、2020 年がコロナ禍にあったため思うように現地に足を運べなかった。そのため、現状で手に入る資料と筆者の記憶を頼りに進めていくことをご了承願いたい。

2. 観劇に関する当事者の要望

障害者が、ライブ・エンターテインメントを楽しもうとする際に何が障壁となり、またどのような配慮が必要なのだろうか。

筆者は 2019 年 6 月に Twitter で簡易調査を行った³⁾。

表 1 「障害者が観劇の際、改善して欲しいと思うことは」(回答数 54 票)

障害者が観劇の際、改善して欲しいと思うことは	
スタンディング時の見えない対策	41%
事前に車椅子席がわからない不安	26%
障害者手帳提示で付添と共に割引	20%
その他	13%

(筆者 Twitter アカウント <https://twitter.com/calinoso/status/1139864922462883840>) 2021/3/3 確認

筆者が意外に感じたのは、付き添い者の費用負担よりも、席に関する不満、特にコンサートでのスタンディングや、観劇でのスタンディング・オーバーション時に観えなくなってしまうことへの対策がなされていないことへの不満が多かった点である。

一方、厚生労働省が平成 25 年度障害者総合福祉推進事業で行った調査『舞台芸術の鑑賞と表現における社会参加の課題と提言』では、アンケート項目に観え方についての回答肢はなく、その他の回答として観えにくさが挙げられている (図 2-1)。このことから、筆者は、多目的トイレやエレベーターの有無・車椅子スペースの有無などの物理的障壁は認識されている、車椅子スペースでの「観えにくさ」という障壁は、健常な人々に認知されていない・認知されにくい問題なのではないかと考えている。

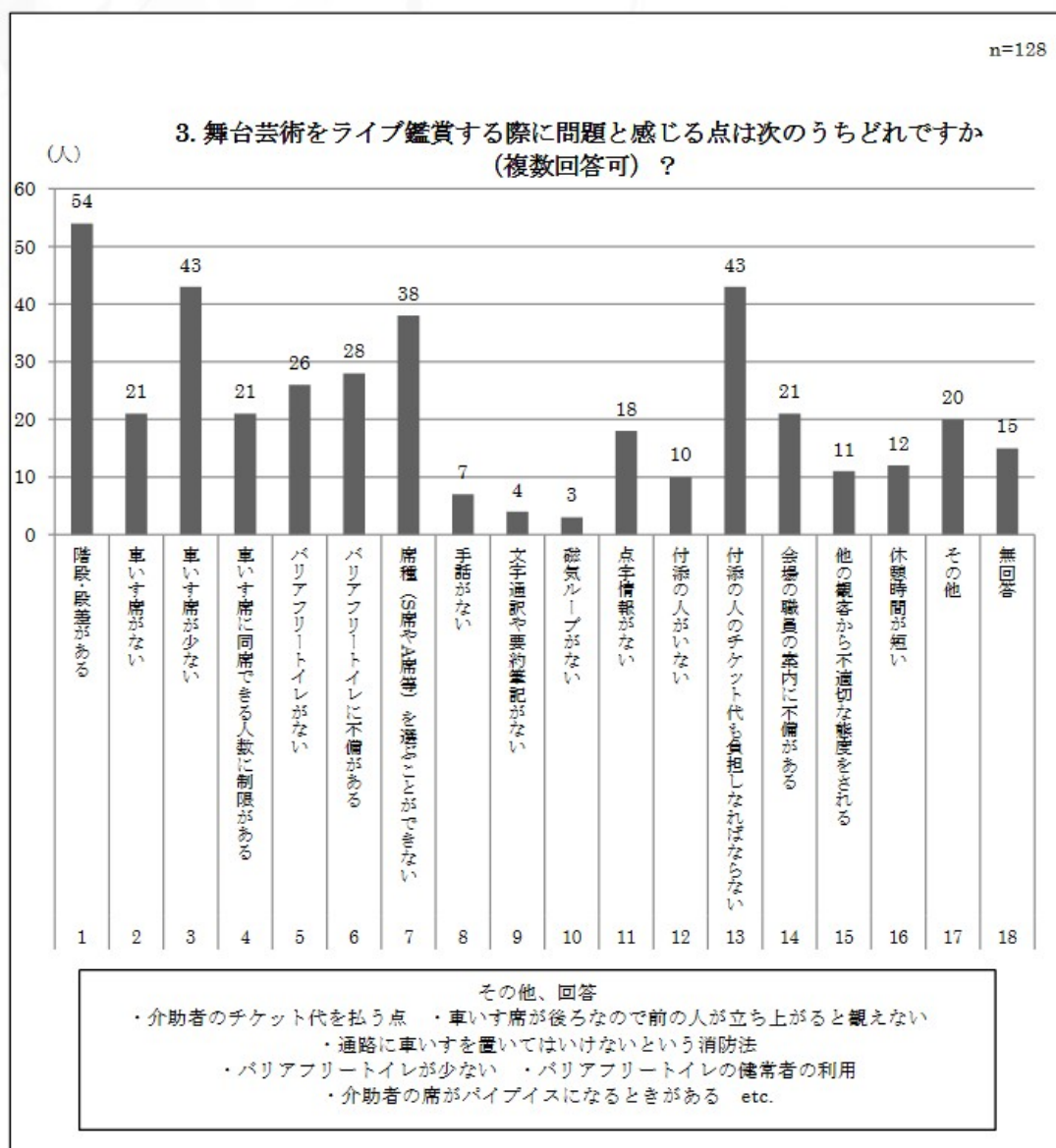


図 2-1 厚生労働省 平成 25 年度障害者総合福祉推進事業

『舞台芸術の鑑賞と表現における社会参加の課題と提言』

「舞台芸術をライブ鑑賞する際に問題と感ずる点は次のうちどれですか」

(https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaiokenfukushibu/0000069536.pdf)

2021 年 3 月 8 日確認

3. 車椅子スペースの具体例

3.1. 車椅子スペースはどこにあるか

まず、筆者が利用したことのある、主に演劇が上演される劇場 3 棟と、演劇以外のコンサートやオペラ・バレエなどが上演される多目的劇場 3 棟、計 6 棟の車椅子スペースの位置を確認し、併せて各劇場の車椅子スペースの特徴と、観え方の雑感を述べる⁴⁾。

車椅子スペースの位置は、web サイト上で公開されている場合を除き、劇場及び主催者

に車椅子スペースの位置を尋ねても、当日現地に行くまで場所を教えてもらえない。また、劇場の web サイトに車椅子スペースが存在することは記載されているが、場所については「公演による」と書かれている場合も多い。したがって、車椅子スペースの場所の公開がない劇場に関しては、筆者が現地で実際に利用した位置を示している。また、筆者の経験では、同じ劇場に異なる演目で訪れても、車椅子スペースの位置は変わらない。

3.1.1. 主に演劇が開催される劇場

① 帝国劇場

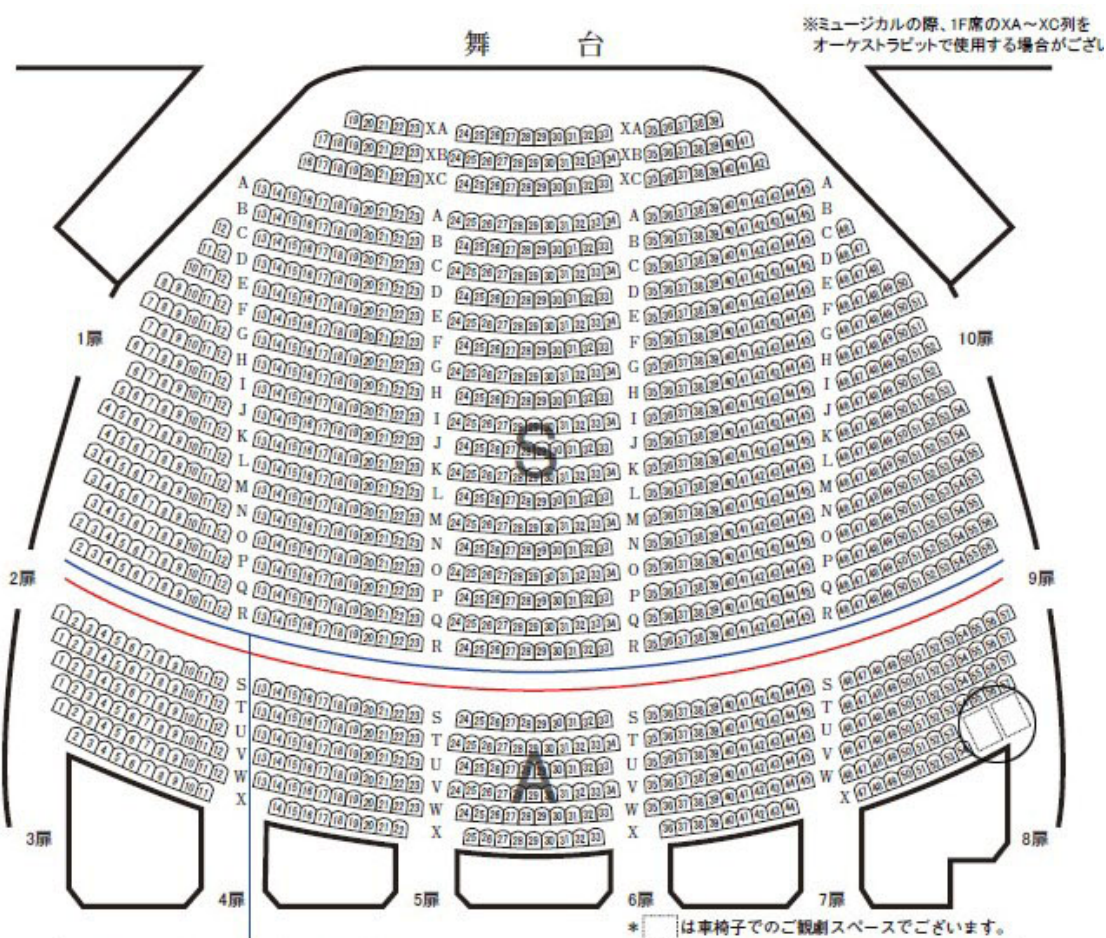


図 3-1 帝国劇場 1 階フロアマップ

(帝国劇場 web サイト掲載図を元に加工 <https://www.toho.co.jp/stage/teigeki/seatingchart/>)
2021 年 3 月 10 日確認

帝国劇場は、車椅子スペースが公開されている数少ない私設劇場のひとつである。1 階上手に 2 台分、最後列 W 列と X 列の間あるが、壁寄りに停止するよう案内されるので、実質 X 列である。図 3-2 のように、X 列の一般席は 15cm 程の段差が設けられており、後方からでも観えるよう考慮されているものの、車椅子ユーザーの眼高では、前方列に観客が入ると着席時でもかなり観えにくい。



図 3-2 帝国劇場 車椅子スペース
(帝国劇場 web サイトより転載 <https://www.toho.co.jp/stage/teigeki/seatingchart/>)

② 東急シアターオーブ

1 階席

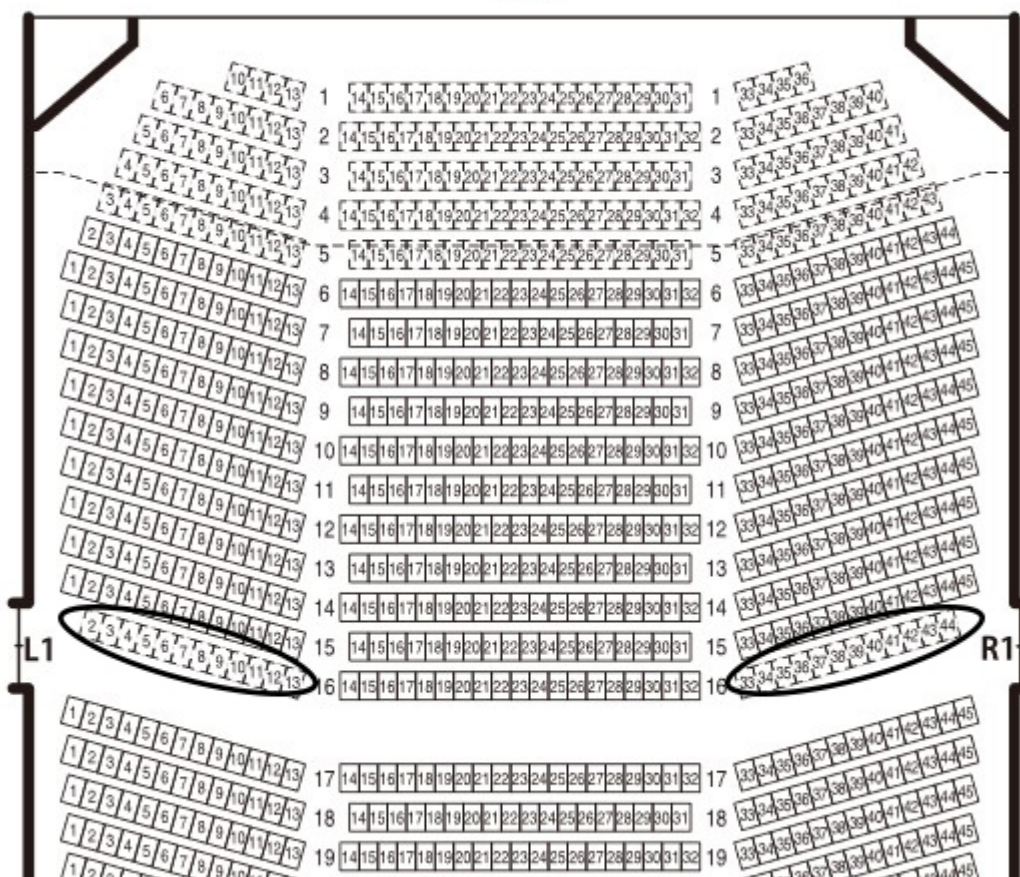


図 3-3 東急シアターオーブ 1 階フロアマップ

(東急シアターオーブ web サイト掲載図を元に加工 <https://theatre-orb.com/seating/seat.pdf>)
2021 年 3 月 10 日確認

東急シアターオーブの車椅子スペースは図の通り、上手・下手共に枠で囲った 16 列 2～13 番及び 33～44 番である⁵⁾。web サイトには、1 階席に車椅子スペースがあるとの案内はあるが、具体的な位置は非公開である。この 16 列は、席が可動式であるため、一般席としても使用できる。このうち、筆者が 16 列 12 番から撮影した写真が図 3-4 である。この位

置からの観え方は良好であったが、別公演にて同列3番から観劇した場合は、若干の観えにくさを感じた。



図 3-4 東急シアターオーブ 車椅子スペースからの観え方
(2020 年 2 月、撮影可能な公演で 16 列 12 番から筆者撮影)

この劇場の場合、通路寄りの席ならスタンディング時でも辛うじて観えるため、筆者が、主催者に理由を述べ、通路寄りにスペースを取っていただくよう配慮を求めたものである。

同列扉寄りの席では、着席時は問題ないが、スタンディング時は観えなくなる。

③ 赤坂アクトシアター



図 3-5 赤坂 ACT シアター1 階フロアマップ
(赤坂 ACT シアターweb サイト掲載図を元に加工 <https://www.tbs.co.jp/act/seat/>)
2021 年 3 月 10 日確認

赤坂アクトシアターでも車椅子スペースの場所は非公開である。筆者は何度か利用しており、H 列であることは間違いないが、上手に案内された際は、同じ位置でありながら、チケットの記載は 37 番もしくは 38 番であった⁶⁾。下手の場合は 4 番に案内された。この劇場は比較的小さい劇場であり、椅子スペースは、センターブロックを基準にすれば実質 8 列目にあたり、舞台は非常に近くに観える。

3.1.2. 主に音楽など演劇以外の公演が開催される劇場

① 中野サンプラザ



図 3-6 中野サンプラザ 1 階フロアマップ
(中野サンプラザ web サイト掲載図を元に加工 <https://www.sunplaza.jp/hall/seat/>)
2021 年 3 月 10 日確認

中野サンプラザの車椅子スペースは、上手 44 番の左隣及び下手 7 番の右隣である。この劇場でも車椅子スペースは非公開である。正面にスピーカーなどの機材が置かれるため、観づらい席である。

② 昭和女子大学 人見記念講堂

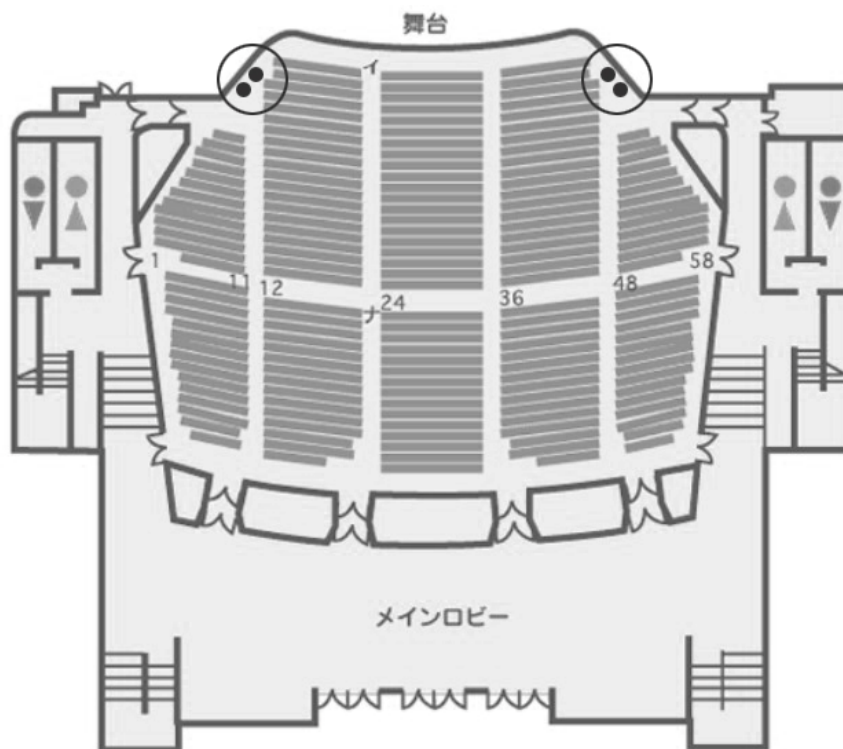


図 3-7 人見記念講堂 1 階フロアマップ

(人見記念講堂 web サイト掲載図を元に加工 <https://hall.swu.ac.jp/seat>) 2021 年 3 月 10 日確認

人見記念講堂には車椅子スペースとして設定されている固有の席はない。筆者の経験では枠で囲った辺りに案内された。図 3-7 では一般席と近いように見えるが、間に通路があり、「席」というよりは、壁に沿って一時的に用意されたスペースのようである。歩行することはできるが、障害のため一般席に座れない観客がこの位置を利用する際は、パイプ椅子が用意される。

③ 東京文化会館（大ホール）

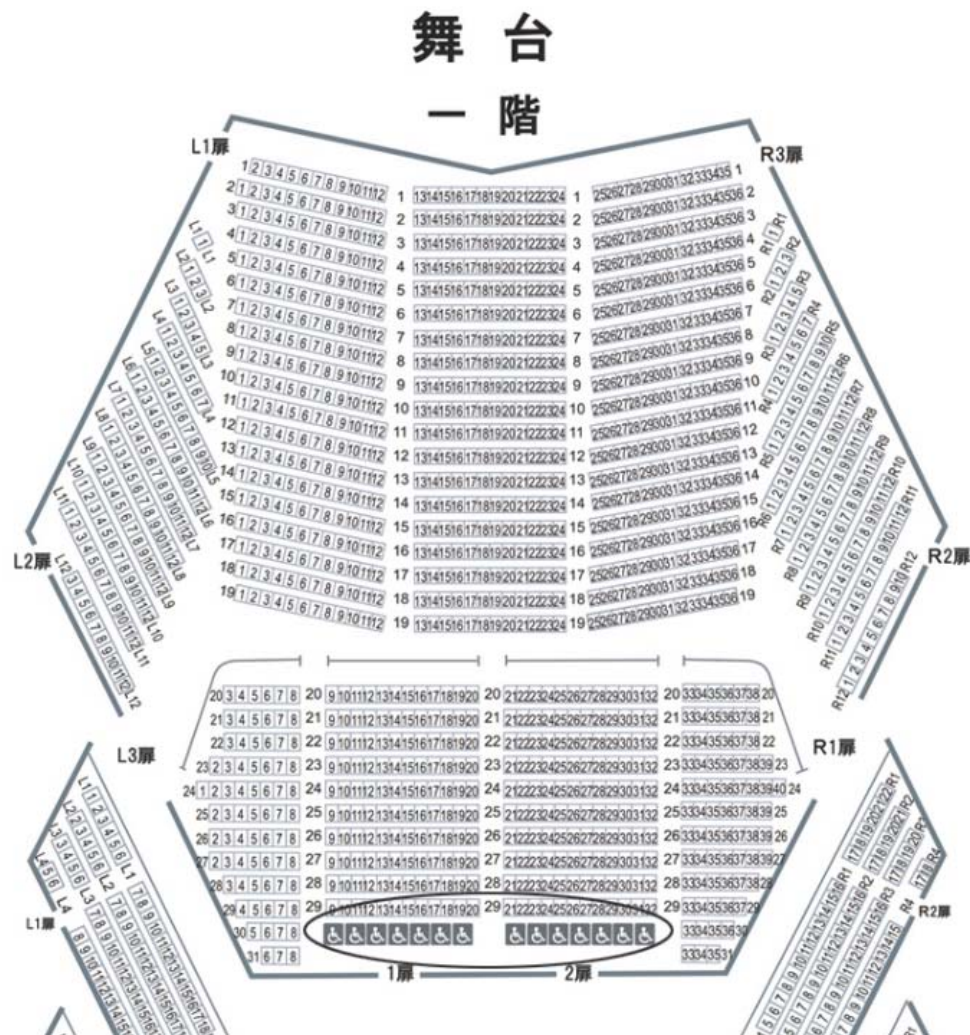


図 3-8 東京文化会館(大ホール)1 階フロアマップ
(東京文化会館 web サイト掲載図を元に加工 <https://www.t-bunka.jp/hall/large.html>) 2021 年 3 月 10 日確認

このホールは、車椅子スペースは 14 台分と、設置数は多い。一般席へはスロープがないため、歩行が出来ない人は、一般席に移ることができない。オペラグラスを使用しても観づらいと思われる程に遠い⁷⁾。

3.1.3. 劇場の車椅子スペースについてのまとめ

前項および前々項の内容をまとめたものが、表 3-1 である。概ね端の方や、後方にスペースが設置されることが多いことがわかる。舞台間口の観え方に関しては、観づらさは感じるものの、全く観えないというわけではない。筆者を含め、障害によっては、長時間首を斜めに向けているのが辛い人もおり、車椅子を斜めに停止させる必要がある。

距離については、東急シアターオーブと赤坂アクトシアターは良席と言えるだろう。

取り上げた 6 棟の劇場だけで比較すると、より新しい方が、また、演劇が主体の劇場の方が、観え方は良好のようである。

表 3-1 劇場の車椅子スペース位置のまとめ

劇場	開館年	フロア	位置	最大席数	web サイトでの車椅子スペースの公開
帝国劇場	1911 年 (2018 年改装)	1 階	24 列（最後列）上手 最端	2 席	○
東急シアター オーブ	2012 年	1 階	16 列上手・下手 サイド	24 席 一般席と併用可	×
赤坂アクトシ アター	2008 年	1 階	8 列上手・下手 最端	2 席 ⁸⁾	×
中野サンプラ ザ	1973 年	1 階	1 列上手・下手 最端	2 席	×
人見記念講堂	1980 年	1 階	固有の席なし		×
東京文化会館 (大ホール)	1961 年	1 階	30 列（最後列） センター	14 席	○

拙稿⁹⁾で示したように、都内 22 劇場の web サイトに車椅子スペース位置が明記されているのは 41%と半数以下で、どの位置にスペースが設置されているか、フロアマップでは確認できないケースが多い。事前に位置を教えてもらうことも出来ないもので、当日案内されて初めて車椅子スペースの場所がわかるといったことが多い。

また、赤坂アクトシアターで観劇した際のチケット（図 3-9）では、37 番は「注釈付き」とされ、S 席対応でありながら、舞台の一部が観えない席となっていた。通常、注釈付き席は一般席が売り出された後に「注釈付き」と断り書きがついたうえで販売される¹⁰⁾。筆者は、注釈付きではない S 席を購入しており¹¹⁾、この車椅子スペースは、注釈付き席同等であったにもかかわらず、その旨伝えられることはなかった。実際の観え方は注釈付きと言われる通り、セットによって舞台の一部は観えなかった。

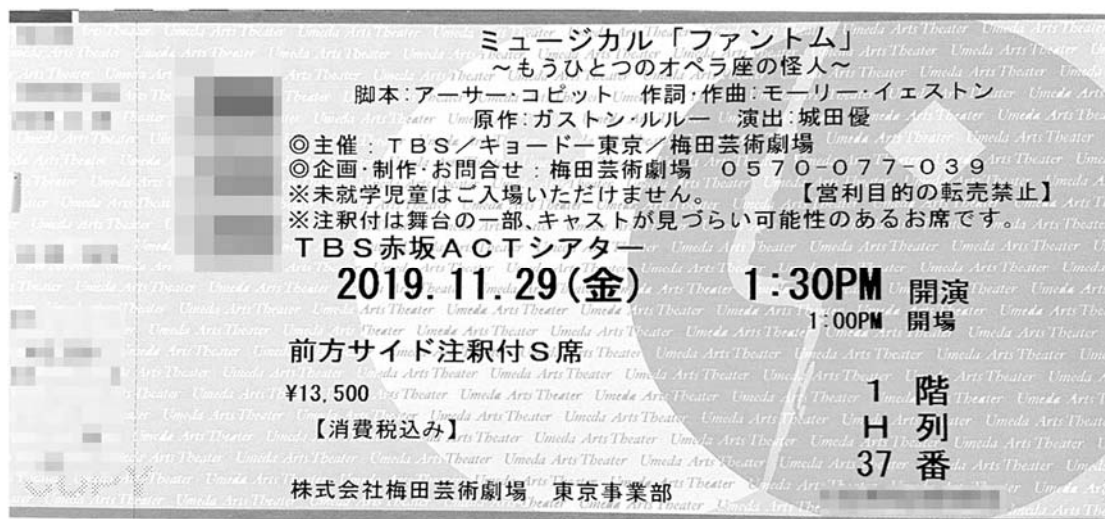


図 3-9 車椅子スペースのチケット

3.2. 車椅子スペースは何故このような位置に設置されているか

車椅子スペースの設置位置が決められる理由について、以前に筆者が舞台製作関係者に尋ねたところ、消防法や各都道府県条例により、安全を考慮した上で設置されるとのことであった。

たしかに、筆者が体験した車椅子スペースのほぼすべてが扉の近くにあり、避難誘導が容易な位置であった。

建築年数の古い劇場では、建築当初にそもそも車椅子スペースを設置しなければならないという発想がなかったことから、後から設置されていることも多いと考えられる。

3.3. 付き添い席について

筆者は一人で観劇するため、他の車椅子ユーザーを観察した範囲ではあるが、横に十分な空間がある場合は、車椅子ユーザーの隣にパイプ椅子が置かれるようである。例えば東急シアターオーブや東京文化会館大ホール等ではパイプ椅子の設置が可能である。しかし、車椅子スペースの横に空間があまりない劇場では、どのような対応がなされているのか定かではない。本件に関する調査は、今後の課題としたい。

4. 車椅子スペースから観る舞台 観え方の問題点

4.1. スタンディング時に関する問題

間口・距離に関しては、劇場によって大きく異なり、多少の観えにくさはあるとしても、舞台が全く観えなくなるということはない。

ところが、上演中やカーテンコール時に、前方列の人が立ち上がった時、車椅子ユーザーは舞台が観えなくなってしまう。演劇の場合、コンサートほど上演中のスタンディングが多くはないが、筆者が観劇したミュージカル公演では、すべてカーテンコール時にスタンディング・オベーションがなされた。コンサートの場合は、予めセットリストが公開されることはあまりないので、スタンディングが予想される公演であるか、またそれはいつかといったタイミングが予測できず、上演中に観客が立ち上がると、しばらく観えなくなってしまうこともしばしばある。

このことについて国土交通省は、車椅子ユーザーにとって望ましい観覧席を図 4-1 のように提言している¹²⁾。

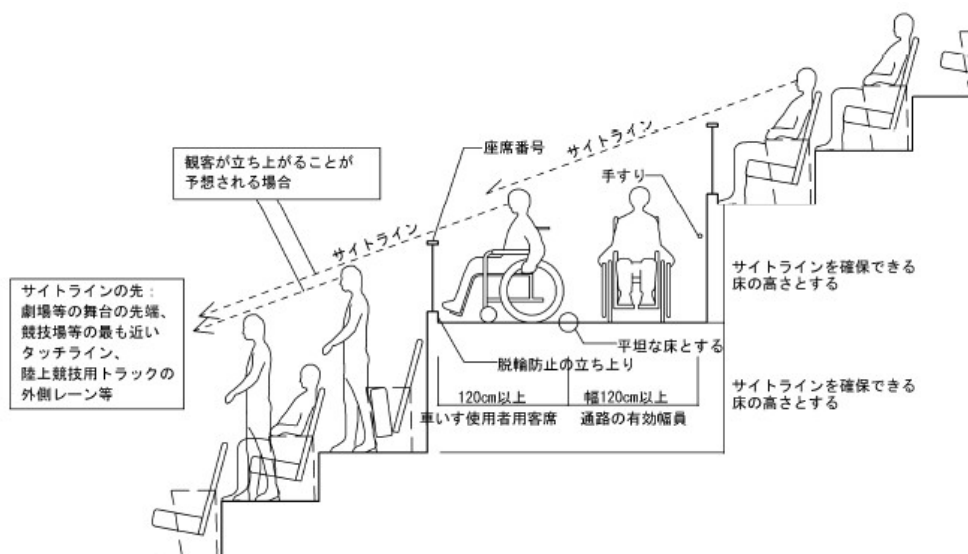


図 4-1 国土交通省『高齢者、障害者等の円滑な移動等に配慮した建築設計標準
(劇場、競技場等の客席・観覧席を有する施設に関する追補版)平成 27 年 7 月』
<https://www.mlit.go.jp/common/001097179.pdf> 2021 年 3 月 10 日確認

しかし、演劇やコンサートが開催される劇場でこのような設計になっているところは、筆者が経験した限りでは皆無である。

4.2. 観劇時の車椅子ユーザーの視線模式図

観劇時、車椅子スペースからの視点はどのようなものだろうか。本稿で取り上げた 6 棟の劇場の図面は公開されていないため、下記のような観劇環境を想定し¹³⁾、着席時とスタンディング時の縮尺図面の作成を試みた。図面はアドビ・イラストレーターを用い、縮尺を 1m=100mm として作成した。

ア) 舞台及び客席想定

- ・客席面から舞台の高さ：1.2m (舞台映像から推定)
- ・舞台から客席までの距離：オーケストラピットの奥行中央付近最大 2m・オーケストラピットから客席間の通路幅 1.5m があると仮定し、3.5m を客席最前列とする。(写真から推定及び観劇時での目測)
- ・最前列は段差なし、2 列目以降は列ごとに蹴上 (けあげ) 18cm (法令上最大高) の階段
- ・客席間の距離 80cm (東京都条例による¹⁴⁾)
- ・舞台から 3 列目一般席までの距離：5.5m
- ・舞台から 4 列目車椅子スペースまでの距離：6.5m
- ・3 列目一般席と 4 列目車椅子スペースはいずれもセンター付近とする¹⁵⁾。

イ) 人体サイズ想定

- ・3 列目一般席を使用するのは、健常な日本人女性とする。平均眼高は着席時約 108cm、起立時約 140cm である¹⁶⁾。
- ・筆者は、車椅子に乗った状態で眼高約 103cm である¹⁷⁾。

- ① 着席時

出演者 170cm

1m

1.2m

舞台

オーケストラピット 2m

仕切 1m

通路 1.5m

最前列 (段差なし) 0.8m

18cm

日本人女性平均眼高 108cm

筆者眼高 103cm

5.5m

6.5m

図 4-2 着席時、車椅子ユーザーの視線

日本人女性の起立時平均眼高は 140cm である。筆者との眼高差は約 37cm となるため、筆者が眼高 140cm の人と同じ眼高位置を保つには、前席との間に高さ約 37cm のかさ上げが必要になる。

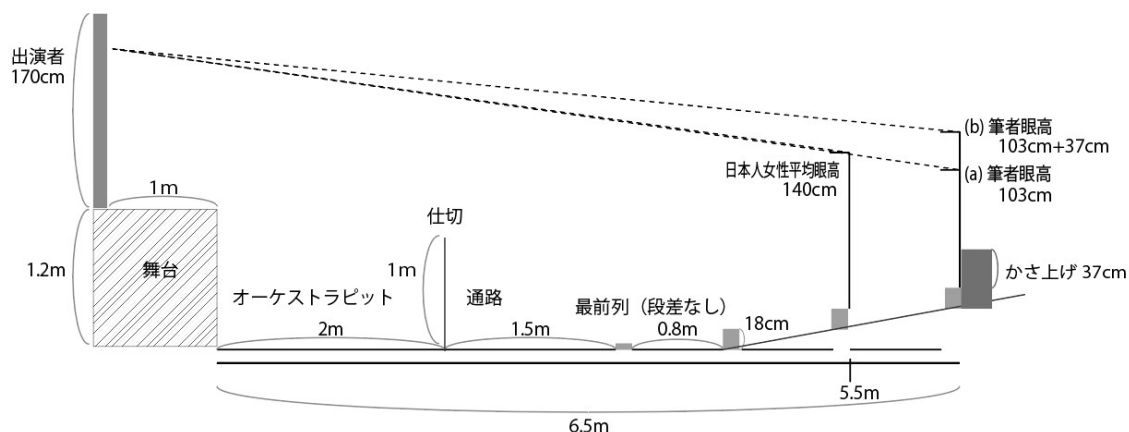


図 4-3 スタンディング、車椅子ユーザーの視線

- 建築基準法施行令第 23 条 2 項では、劇場・演芸場・公会堂等の階段蹴上寸法は 18cm 以下とされており、眼高差約 37cm を階段 1 段で補うことは不可能である。一般席の隣に高

さを同じくして車椅子スペースを設置するのではなく、(b)のようにかさ上げするなど、構造を変えなければ、観やすさは確保されない。しかし、筆者の経験では、1 階席前方でこれほどの段差がある劇場はない。仮に筆者が、女性車椅子ユーザーの平均眼高 107cm と同じであったとしても、単純計算で 33cm のかさ上げが必要になる。

一方、中野サンプラザでは、車椅子スペースはほぼ最前列の 6 番の左隣と 45 番の右隣であるが、この劇場を利用した際、筆者は車椅子スペースで観えにくさを感じ、44 番¹⁸⁾に移らせてもらった。線を引いてみると、図面上は問題がないように思える。しかし実際には、着席時は問題なかったものの、観衆が総じて立ち上がった際、筆者は座ったままなので、観えなくなってしまった (図 4-4)。

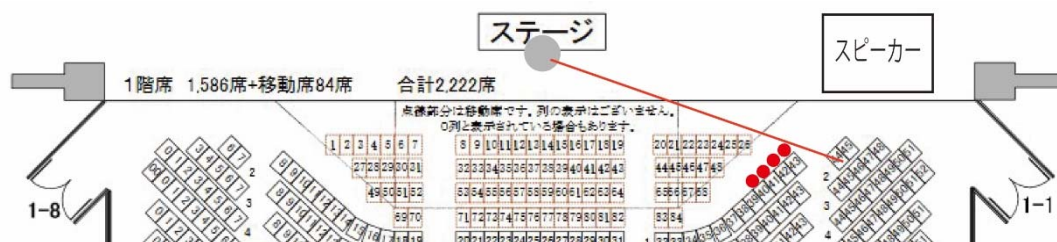


図 4-4 中野サンプラザでの着席場所

4.3. かさ上げ対処法としてのクッション

劇場では小柄な観客のためにクッションの貸し出しがあり、これを使用すれば 10cm 程度のかさ上げができる。それゆえ車椅子ユーザーも、このクッションを使えば良いのではないかと考えられることがある。しかし、車椅子はユーザーの体にフィットするよう作られており、重心が上方に上がればそれだけ不安定になる。また、かさ上げされることによって背中に対する背もたれの位置が下がることになり、非常に危険である。筆者も実際に試してみたが、肘置きに肘を固定することが出来ず、体勢が不安定であった。また、電動車椅子の操作レバーの位置に手が届かなくなってしまう、操作に支障が出たので、休憩時間にホワイエに出ることが出来なかった。

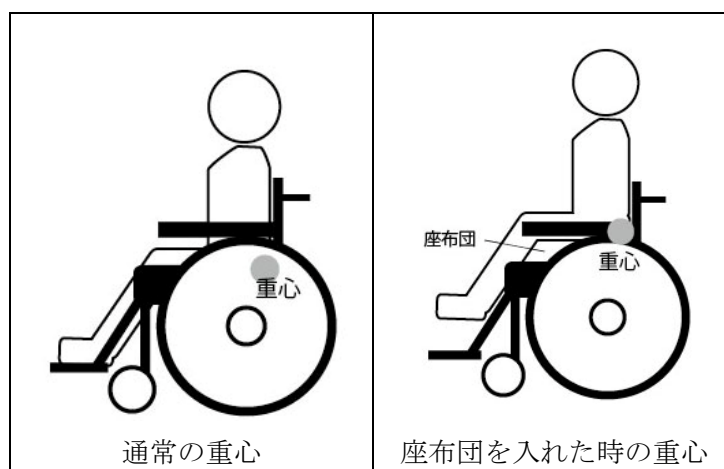


図 4-5 クッションを入れた時の重心の変化¹⁹⁾

出典: 岩崎千絵美 (2020)「車椅子でミュージカルを観に行こう」『日本ミュージカル学会寄稿文集』第 3 刊, p.25.

4.4. まとめ

演劇でのスタンディング・オペーションは、カーテンコール時に 1～2 回、多くても 3 回程度であり、時間にして約 20 分程度である。コンサートにおいては、公演にもよるが、立ち上がるような曲調で 4 分程の曲が 5 曲分演奏されると仮定して、トータル約 20 分程度である。総公演時間から見れば、起立している時間はそれほど長くないのかもしれない。しかし、この間の車椅子ユーザーの心理は、非常に複雑なものである。

また障害の特性上、低身長障害者や、背もたれをある程度倒さないと姿勢が保てない車椅子ユーザーも存在する。そのような人達にとっては、現在の車椅子スペースでは、着席時であっても観えにくいであろう。

5. 少しずつ変わる劇場公演 ～より快適に観るために～

5.1. 日本型バリアフリー

海外、特に欧米各国に度々足を運んでいる車椅子ユーザーの話によれば、日本のバリアフリーは設備の面では進んでいるようである。例えば、大きな駅にはエレベーターが設置されており、電車の乗降時に駅員によるサポートもなされている。一見、バリアフリーが進んでいそうな欧州諸国などでは、エレベーターが設置されていない駅も未だに多く、その代わり周囲の人々のサポートが当たり前になされているので、車椅子ユーザーが利用しようとしても問題はないという。

日本の場合、学校教育の過程から健常者と障害者は分離されることが多く、両者の接点が少ない。そのためか、2 章で取り上げたアンケート項目を見ても、その一端が伺えるように、障害者が求める配慮と、想定や実際に提供される配慮にズレが生じることは多々ある。ともすれば、バリアフリーとは設備を用意すること、「設置すればそれでよし」という考えに傾きがちであり、使い勝手までを考慮したものは、案外多くはない²⁰⁾。

今回取り上げた「観えにくさ」は、実際に車椅子で利用してみてもはじめて気が付くことであるかもしれないが、観劇のスタンディング・オペーションを想定し、そのために車椅子ユーザーは舞台を観ることが出来なくなってしまう可能性があるという視点が、設計段階において欠けているとしたら、非常に残念である。

5.2. 快適に観るために当事者ができること

では、車椅子ユーザーは、与えられた環境のみを享受し、改善されるのを待つだけなのだろうか。当事者自身が、環境を改善するために何をしたら良いのだろうか。

以下は、筆者が行ってきた快適な観劇のための工夫である。

(1) 車椅子スペース予約時に希望を伝える

筆者の経験では、多目的トイレ付近の車椅子スペースから予約順に、席の確保がなされている。したがって、同じ演目を数回観劇する場合でも、何も希望を伝えず、予約順が同じならば、主催者もしくは劇場側が指定した位置となる。例えば赤坂アクトシアタ

一での公演は、希望を伝えなければ、毎回上手側であった。そこで、他の観客の迷惑や運営に差し障りがない範囲で、1回目は上手、2回目は下手というように希望を伝えた。また、シアターオーブのような可動式のスペースの場合、センター寄り通路側にスペースを希望すれば、着席時もスタンディング・オーバーション時も比較的観えやすくなる。

スタンディング・オーバーション時に観えなくなることを伝え、スタッフの誘導によって若干通路側への移動や、スロープの設置があり、前方に行くことができる場合は、その時だけ移動できるよう希望を伝えている。

(2)要望書を送る

赤坂アクトシアターの多目的トイレは、2019年11月時点では、入り口のドアがセンサー式になっており、介助者と共に利用するとドアが自動的に開いてしまっていた。また、手すりの挙動が通常の使用法とは逆になっており、使えない・使いにくい仕様となっていた。筆者は、このことについて劇場支配人宛の要望書を書き、翌年11月同劇場を利用した際には改善されていた。

また、帝国劇場には車椅子スペースでの観え方に関して、シアターオーブには多目的トイレに設置されたゴミ箱が足踏み式であったことに関して、それぞれ支配人宛に要望書を送った。

(3)第三者と連携し、配慮を求める

筆者が観劇するような公演では「車椅子スペース」としてのチケット販売がなく、また車椅子スペースがどの席種にあたるかの記載がないことが多い。ある公演で、筆者はA席を購入した。ところが車椅子スペースの利用を申し出ると、その席はS席対応であるため、差額を支払うよう言われた。障害者差別解消法に照らして、主催企業がある自治体の広域相談員に相談し、相談員と主催企業と話し合いを持っていただいた。その結果、差額に関しては利害関係者が多岐にわたるため、すぐに改善することは難しいが、この主催者の公演に関しては、当該公演以降、webサイトに車椅子スペース利用の際はどの席種を購入すべきかについて明記されるようになった。

筆者は、2019年の劇場への介助者入場拒否問題²¹⁾以来、障害者がより快適に観劇するためには、障害者自身が劇場に足を運び、客席に限らず、動線、設備、サービス等あらゆる分野で、どんな小さなことでも気づいたこと・不便に感じたことは伝えていかなければならないと考えている。すぐに改善されることが難しくとも、当事者でなければ気づかないことを知らせていくことは、大変重要なことである。

6. おわりに

本稿では、劇場の車椅子スペースについて、その観え方を位置や着席時・スタンディング時の視線模式図を通して概観してきた。

車椅子スペースからの観え方、特にスタンディング時に関しては、以前から多くの車椅子ユーザーに指摘されてはきているが、建築構造そのものから見直さなければならず、法

令にも関係するため、改善が難しい。また、席種が選べない問題及びそれに付随するチケット料金の問題と密接であり、当事者の意見が反映されにくく、意見聴取の機会もないに等しい。劇場の立案・設計段階で、障害者が関わっているか、あるいは確認点検時に、障害者の内覧や実際の使用チェックが行われているのかも不明であり、ともすると健常者のみの視点で作られている可能性もある。

また、配慮を求めることについて、「わがまま」と捉えられたり、「ずるい」などと言われたりすることに対する不安から、我慢をしまったり、「言っても無駄」「誰に言ってもいいかわからない」などと諦めてしまったりする障害者も少なくない。しかし、暮らしに快適さを求める気持ちは健常者も障害者も変わりはない。たとえ不便を感じたり、悔しい想いをしたりすることがあっても、当事者が現地に足を運び、配慮を求め、お互いが現状可能な妥協点を見出す努力をすることは、ひとつひとつ問題を解決していく唯一の近道であろう。

公共施設・設備は、人が「標準化」に合わせて利用している。だが、障害者の障害状況は、一人一人異なっており、障害者向けサポートを標準化することは大変難しい。各自の状況に合わせたサポートには、経済的・人的コスト、そして人々の理解が必須ではあるが、それを乗り越える工夫こそが多様性を受け入れる社会であり、エンターテインメントの力である。

註

- 1) 正式名は『高齢者、身体障害者等が円滑に利用できる特定建築物の建築に関する法律』である。
- 2) 岩崎千絵美 (2020)「観劇におけるバリアフリーの現状と事例報告～SNS が“ルール”を変える～」『情報化社会・メディア研究』第 16 巻, pp.1-12.
- 3) この調査は、より多様性に富んだ回答を得るため、障害者・健常者共に対象とした。
- 4) 演劇主体の劇場とコンサート等が主体の劇場を分けたのは、観ることを重視する場合と聴くことを重視する場合の違いのほか、チケットの販売方法にも違いが見られることがあるからである。公演にもよるが、演劇主体の場合、舞台からの距離や観え方によって S・A・B 席と席種別に販売されるが、コンサートの場合、一律料金ということも珍しくない。
- 5) 1 番及び 45 番は席が存在しないのか、車椅子スペースとして一般販売しないよう敢えて番号が振られていないのかは不明である。
- 6) 非公式ではあるが、上手・下手とも 2 席ずつ計 4 席あるとの情報もある。取り外し式になっているかは不明である。筆者が利用したところ、一般席 2 席分の幅を車椅子スペースとして取っているわけではなさそうである。
- 7) 筆者は、コンタクトで矯正後視力 0.8 程度である。
- 8) 註 6 の通り、2 席なのか 4 席なのか不明である。筆者は、車椅子が 2 台並んでいる場面を見たことがないので、ここでは 2 席とした。
- 9) 前掲註 2 の岩崎 (2020) を参照されたい。
- 10) 注釈付きチケットが販売されるかどうかは、公演による。
- 11) 公演にもよるが、車椅子スペース専用のチケットが販売されるケースは非常に少なく、車椅子ユーザーは一般席を購入し、主催者もしくは劇場の判断で、観劇当日に、手持ちのチケットと車椅子スペース用のチケットが交換されることがある。
- 12) サイトラインの算出方法については『日本財団パラリンピック研究会紀要第 2 号 (別冊)』(2015 年 5 月) が詳しい。
http://para.tokyo/english/uploadimages/PRG_Journal_2_extra.pdf P16-17 2021 年 3 月 10 日確認
- 13) この観劇環境は、現在入手可能な資料からの推定と、筆者の経験で、およそ妥当であろうと思われるサイズを設定した。

- 14) コトブキシーティング web サイト『客席の関連法規』
https://www.kotobuki-seating.co.jp/rollback_chair_stand/seat_regulations.html 2021 年 3 月 10 日確認
- 15) 筆者の経験ではあるが、実際の劇場では、この距離で車椅子スペースがセンターに設置されることはない。
- 16) 産業工芸試験所意匠第一部『デザインのための生体計測値』
<https://unit.aist.go.jp/tohoku/techpaper/pdf/4746.pdf> 2021 年 3 月 10 日確認
- 17) 日本財団パラリンピック研究会が行った調査によれば、車椅子ユーザーの眼高平均は男性約 113cm 女性約 107cm である。
http://para.tokyo/english/uploadimages/PRG_Journal_2_extra.pdf 2021 年 3 月 10 日確認
- 18) ただし、チケット販売の対象とはならない席で、車椅子から移乗可能な人・歩行が可能でも配慮が必要な人向けの席である。
- 19) この図は重心の変化を模式的に示したもので、物理学上正確な重心を示しているわけではない。
- 20) たとえば多目的トイレの備品が背中側の壁に設置されていることはよくある。
- 21) 前掲註 2 の岩崎（2020）を参照されたい。